世界初のがん小説「ベバシズマブ騎士団！」

鳥呼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界初のがん小説「ベバシズマブ騎士団！」

【Ｎコード】
Ｎ８２９３Ｐ

【作者名】
鳥呼

【あらすじ】
中外製薬さんに怒られるかもしれない。

ある日あるところに少女が1人生まれた。小さな歩くのがやっとないたいたけな少女だ。彼女は自分がどこから来たのかどうやってこの地にたどりついたのかは知らない。知らない場所で自分は立っていた。

少女はお腹がすいていた。とにかく、とてもお腹がすいていた。

だから口を開けた。するとこの地はおいしいではないか、空気も、ふわふわしたこの土地の土もそこに生えている何もかもが！これはこの土地は、人間でいえば、正当な人、ということだろう。正常細胞ともいう。これは本当に少女にとってはおいしいものだ。甘酸っぱくってとってもおいしい・・・。しかも食べ放題。食べても食べても文句をいう人たちは誰もいない。いままで何もかもが正常だったから。ふふふ・・、少女は楽しそうに笑った。そしてまた食べた。食べたいだけ食べた。むちゃむちゃ、にちゃにちゃ・・むちゃむちゃ、にちゃにちゃ・・

際限なく食べた。いくらでも食べられた。

と少女は自分の手足をみると肥ってきていた。いや、肥るというより膨れてきたのだ。と、少女は嗤った、いくらでも自分を嗤えた。だってこのあたりはなんでもおいしいもの。嗤いだすと膨れたお腹がすっとする。お腹がすっとすると少女、いや少女はもう少女ではなく1匹の怪物だ。形よく並んだ歯もキバが出てきて醜い。腕もこんなに太かったか、ほっそりしていた足もすごく太い。目はもう肉で埋まり黒ずみ垂れてきて目の形はしていない。顔かたちも崩れて首との境目もはっきりしていない。

もう自分で自分の足元は見えない。顔もここに来たころとは違う。それでも口はいつでも食べていられるように耳まで裂けて。手はいつでも食べ物をつかんでいられるようにお腹や太ももから何本も出てきた。いや、これはもう手というよりは触手か。手はいくらでも

のびていく。いくらでも大きく広げられるのでいつでもこの辺のものを食べていける。少女、いやこの化け物はいくらでも食べられた。
そう、彼女の名前はキャンサー。醜くぶよぶよと肥った怪物。際限なく増殖していくキャンサー。でも怪物は自分のことを全く気にしなかった。だってここには世間体やお金や人生なんか考える場所ではないから。
採食は際限なく続く。そうしている間も休みなくこの怪物はそのあたりのものを際限なく食べる。そしてぶよぶよとした自分の身体をみて嗤う。嗤いだすとお腹がすっとする。お腹がすっとすると怪物がそっくり同じ怪物がもう1匹出てくる。自分の身体から全く同じ怪物が。1匹が2匹、2匹が4匹。4匹が8匹、16匹、32匹、64匹、128匹、256匹・・・、同じ怪物が際限なく増殖する。触手ももう数え切れないほどある。何万、何億、何兆・・。
このあたりになると下りたった最初の場所に身体がべったりくっついて境目がなくなる。最初におりたった正常細胞という地はもう自分との境目もなくなった。自分と同化してしまったのだ。それでも怪物たちは食べ続けた。際限なく食べ続ける。それから手狭になると怪物同士手をつなぎ合って血管を通わせる。するとパワーが出てくるのだ。
触手や増殖とはまた違ったパワーがでてくると、このあたりの端っこにワープできる場所があるのに気付く。そうだ、ワープだ。この場所から全く違う新天地に行けるのだ！ワープのキーワードはリンパ腺、血管、血液、流れ。そして新天地で怪物たちは同じ方法で増えていく。食べるものがあってもなくても同じだ。彼らは1つだった。テレパシーで連絡もしあえることが可能だ。そうして際限なく際限なく増えていく。この土地がどうなろうと知ったことではない。

ある日突然天から穴が1つあいた。一体これは何だろう、そう思っているとなんと仲間の一部が切り取られた。何かキラキラ光るま

た電気と言うものだろうか、ジジジという奇妙な音もする。この土地とキャンサー達の境目あたりを慎重にはぎとっていく。血が吹き出る。この土地は私のもの、だからこの血は惜しい。取られたくない。

畜生、切り取られてたまるもんか。私達を排除しよう立って無駄だ。ここは私達のものだから。

切り取られた後も仲間ががんばったのかほんの少しだけ仲間の触手がへばりついていた。これは取り残しではない、私達の増殖の努力のたまもの。大きな意思の力かまたは神の威力か。私達を鋭いナイフでそぎ落とそうとしたけれど、なんとか大丈夫だったわ。キャンサーは血管を通じて遠く離れた仲間に連絡を取る。私達は大丈夫。これからここで触手を伸ばして仲間を増やして増殖していくわ。だから平気。私達キャンサーはしぶといの、この土地が生きている限りは私達も生き延びてやる。怪物キャンサーはみんなで1つ。

一番頼もしい分家仲間といえば肝臓に巣食うキャンサー。肝臓はとっても大きくて食べがいがある。その近くに腹膜という広大なただっ広い土地もあり、薄いが味のおせんべいといったところか。私達も薄い土地でも浅く広く広がれる。ここならはぎ取られないだろう、大丈夫。元の場所には戻れなくとも私達はさらなる高みをめざして増殖していくの。そう、だって私達はキャンサーだから！

メッセンジャー役をしてくれるのはリンパ液や血液をめぐる足の速いキャンサー。そうして私達は分裂して文化していく。正常細胞がどうなろうか知ったことではない。

ただちょっと図に乗りすぎたかもしれない・・。

私達キャンサーを兵糧攻めにしようというのか何か妙なものが血管内に注入されつつある。彼らは一体何者？彼らがくると私達の連絡がとりにくく、つながりにくくなる。また私達がせっかくつくりあげた私達だけの血管がこわされる。くそっ、私達を排除しようたっていけないわ。私達をどうしても排除したいならこの元の広大な

土地、正常細胞達、私達の食料も全部だめにしてやる、めちゃくちゃにしてやる、死なばもろとも、絶対にここから出ていくものか。それでなくとも例のナイフで大勢の仲間がはぎとられたのだ、元通りに修復するまでどのくらいしんどかったか、わけのわからないこいつらに服従なんか絶対にするものか。

血管内から何か槍のようなものをもった騎士団がやってくる。そしてその槍で私達の触手や連絡網を切断しようとする。キャンサー達はだみ声で怒りの声をあげる。

「この土地はわれらのもの、名を名乗れー」

騎士団言う。

「われらはベバシズマブなり～、キャンサーを封じ込めるためにやってきたものなり～」

騎士団続けて槍を振り上げてキャンサー達の連絡網、苦労してやっと作り上げた通信システムを切断しようとする。当然われらは抵抗して応戦する。われらはただ領地を広げて食べさせてもらいたいだけ、それがなぜいけない？なぜ排除、封じ込めようとする？

ベバシズマブ？なんと覚えにくい、かつ言いにくい名前だ？なぜそんなのがわれらのところにやってくる？誰がよこした？誰がわれらを嫌う？

ベバシズマブ騎士団は聞く耳をもたなかった。キャンサー達の連絡網、触手を槍を振り上げてかたはしから切断する。この槍は不思議で振り上げるたびにキャンサー達独自の通信システム、テレパシー機能が落ちていく、堕ちていく・・・。

キャンサー達がパニックになっている間、騎士団はころ合いを見て第２部隊を送り込む、その名前はケモ隊。ケモはダイレクトにキャンサー達に斬り込みかかる。キャンサー達はナイフのようなものに仲間を切り取られるよりも自分達が枯れていくのを非常に苦痛に感じた。

自分達の貴重な触手、連絡網、パイプが溶けていく・・・。

騎士団はキャンサー達が苦しむのをじっと見つめている。また仲間のケモの斬り込みを補助して効果をあげるように取り計らった。彼らはとても慎重だった。自分達がやりすぎるともともとあったこの綺麗な土地自体も滅びるからだ。やりすぎるとキャンサーどころか本家本元が滅びる。われらはキャンサーを枯渇させ弱らせるだけ、キャンサーはいいがこの地面この土地自体の耐久性も良く見ていかないとキャンサー達と共倒れになる。特に我らが対キャンサーに効果があるのはこの土地だけだ。ここはＬＡＲＧＥ　ＣＯＬＯＮ．

戦争とはこういうものだろうか、ベバシズマブ騎士団、別名アバスチン。

キャンサー、別名がん。

第２部隊ケモ、別名化学療法剤（抗がん剤）

（後書き）

がんの触手に手錠をかけるタイプのハーセプチン騎士団と言うのもあります。話題の分子標的タイプですな。抗がん剤は製薬会社各社が命名にも社命がかかっているのかインパクト大きいのが多いです。どれもインパクト大なのでかえって覚えにくくなるという弊害も、いや鳥がアホなだけさ・・。ちなみに鳥が好きなのはＣＤＤＰの「ランダ」超覚えやすくっていいな。（「ブリプラチン」もいいけどさ。）発売されて長い老舗の風格だが汎用されている。抗がん剤も日進月歩です。研究者も臨床も日々努力さ。もちろん患者様も・・・・。（万一不快な記載がありましたら遠慮なくご指摘を、訂正もしくは削除させていただきます）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8293p/

世界初のがん小説「ベバシズマブ騎士団！」

2010年12月31日02時55分発行